

滋賀県手話言語や情報コミュニケーションに関する条例検討小委員会に参加されている皆さま。滋賀県大人の発達障害者の会 niwaniwa の佐藤信吾です。成人の発達障害（自閉症）の当事者です。

今までの二回の小委員会の中で、自閉症を持つ私が、当事者としてコミュニケーションについて訴えることが出来てきたと思います。

同時に、やはり色々な場所で色々な方と話す中で、「発達障害」という障害がまだまだ知られていないとも感じています。先ごろも、身体障害を持つ高齢の方に「発達障害とは、ダウン症のことですか？」と訊かれました。ダウン症は「発達」に遅れの出る障害ですが、私の「発達障害」とは違います。

発達障害については、ここでは長くなりますので書けませんが、多くの方が、発達障害についてより知っていただければと思っています。

私は、障害が原因かはわかりませんが、丁寧に言葉を積み上げて論理的に話をするのを苦手になっています。今回、文章にしてお伝えする事にしたのも、小委員会の場では、なかなかしっかりと話せないと予測するからです。

・非言語コミュニケーションの保障

私は「よく話すことの出来る」自閉症者ですが、自閉症を持つ方で、発声・発語のない方も多くいます。彼らの中には、絵カードやマカトンといった、簡単な絵や手話に似たハンドサインを用いて意思の疎通をする方もいます。その手法もコミュニケーションであると認めてください。

また、緘黙（かんもく）の方もいます。緘黙とは、言語能力があるにもかかわらず、声に出して話せなくなる障害です。選択的緘黙は、家族や親しい友人とは話せるのに、学校や知らない人など、特定の状況で話せなくなる障害です。緘黙の方は、言葉以外の手段（音をたてる、指差す、書く）などでコミュニケーションを取ることが出来る場合があります。緘黙の方への理解が進むこと。緘黙の方への情報保障やコミュニケーションの保障がされることを希望します。

・介助者によるコミュニケーションが適切に行われる権利保障

今回、参議院議員となった、ふなご靖彦さんは、ALSという病気のために、文字盤を使い、介助者がそれを読み上げるというコミュニケーション方法を取られています。

重度の自閉症者の中には、同じように文字盤や介助者を使い意思を伝える方がいます。

しかしこれは、介助者によって本人の意思が捻じ曲げられたり、ねつ造されるかもしれないという危険があります。アメリカでは、1992年に、介助者のねつ造により、自閉症の少女の両親が少女に対して「性的虐待をしている」とされ告発を受ける事件がありました。

日本でも、2002年に「NHKスペシャル」で放送された「奇跡の詩人 ～11歳 脳障害児のメッセージ～」という番組で、生後まもなくからの重度の脳・身体障害を持つ11歳の少年が、文字盤にある文字を（母親の補助によって）指すことで、他の人とコミュニケーションを図る手法（ファシリテテッド・コミュニケーション）で本を書き話題となったことが取り上げられました。この放送の後、NHKには「母親が少年の手を無理に動かして文字盤を指させている」「11歳の子どもが知らないような難しい言葉を発しているのは不自然」といった声が寄せられました。日本小児科学会倫理委員会からもNHKへ批判を込めた公開質問状が送られました。日本聴能言語士協会からもファシリテテッド・コミュニケーションについて批判的な見解が出されています。

この少年は、現在、29歳になっています。今も母親の介助で「意思」を発しています。胡散臭いスピリチュアルの集団から、母親の「介助」を受けてインタビューをされています。

重度の障害があり発話できない方が、テクノロジーや介助の力によって意思疎通が可能になるのならば、素晴らしいことです。それはコミュニケーションとして保障されるべきものです。しかし同時の、その「意思」が本当に障害当事者の物であるのかを注意して見るべきものと考えます。